ひとつの授業から国際理解と平和の教育を考える

学校長　日比　裕

1．身近な地域社会と遠い地域

本附属中・高校では共同研究の総合テーマとして「教育活動の総合化――国際理解と平和の教育を軸として――」を設定しており、その研究成果は本紀要に発表されている。

また研究旅行もこのテーマと関連させて計画され、目的地に中学３年は広島地方、高校２年は沖縄が選定されており、現地で平和教育に関連した見学や聞き取りなどの学習活動が日程に組み込まれている。

研究は各年度の紀要や生徒の研究物に見るように、かなりの成果を収めているが、まだ不十分であり、実践的にも理論的にもテーマ展開の深まりは今後にまたねばならない。私としては、広島や沖縄など現地での学習活動の意義とともに、日常の授業がどのように総合性を実現することができるのか、あるいは身近な地域社会の教材がどのように遠い地域のできごととつながりながら、国際理解や平和の教育が具体的に展開されるのかといった問題に関心がある。日常の授業と種々の行事が内的な関連性を獲得することによって、両者の意義もまた深まるわけである。

以下には、私の参観した一つの授業を窓口にして、身近なできごとと遠い地域のできごととの関連性について、少し考えてみたい。

2．豊川海軍工廠の空襲と社会科「戦争への道」

新城市立新城小学校は私が長年一緒に授業研究を進めている学校であるが、その1989年度の研究発表会で６年社会科「戦争への道――第２次世界大戦――」（授業者・林里江子教諭）を参観した。

指導案には授業の目標がこう書かれている。

「本時の目標：戦局が不利になっても戦争を続けようとする軍部、やめさせようとしない国民に対し、自分の考えを持つことができる。

具体目標

①国民には、戦争の実情は知らされていなかったことを知る。

②昭和20年になり、東京大空襲、沖縄占領、原爆投下、ソ連参戦と敗戦の色が濃くなっていったことがわかる。

③治安維持法が拡大解釈され、言論や思想の自由は全くなかったことを知る。

④豊川の海軍工廠で働いていた人たちの多くが、B29の爆撃にあい、亡くなったことを知る。」

授業はAS児の発表から始まる。かれは豊川海軍工廠の空襲についての祖父からの聞き取りを中心につぎのような内容を発表した。

①豊川海軍工廠でB29の爆撃にあい、祖父の妹が戦死した。

②昭和20年８月７日のできごとであった。

③せめてあと１週間早く戦争が終わっていたら、祖父の妹は死ななくてすんだ。

この発表を受けて子どもたちから自ずと「なぜもっと早く戦争をやめることができなかったのか」という問題が出された。その問題は「国民はなぜだまっていたのか」という疑問に発展した。その議論を進めるなかで、子どもたちはあらためて一つの資料に注目していった。それは教師が前々日にすでに子どもたちに提示したもので、そのときには教室の壁面に貼られていた「読売報知」昭和20年８月８日の新聞一面（コピー）である。そこに豊川の空襲の記事が載っているのである。

見出しとして〔豊川（愛知）に約百機〕小見出しとして〔戦爆連合で来襲、爆弾攻撃〕とあり、続いてつぎのように書かれている。

「【名古屋電話】７日９時半ごろより11時ごろまでの間に大型機を主とする戦爆連合の約百機は志摩半島沿岸付近より東海軍管区内に侵入、愛知県豊川付近を爆弾攻撃ののち南方海上に脱去した、これがため豊川付近に若干の被害あったが軍官民の協力によって被害は軽少であった」

何人かの子どもたちは、「被害は軽少であった」という記事を取り上げ、新聞には被害は軽少と書かれているが、豊川の空襲で実際は2,544人ものひとが亡くなっている。新聞にこんな嘘のことが書かれていたのだから、やはり国民は本当のことを知らされていなかった、と発言する。子どもたちは豊川空襲のようすや被害について調べたことを発表していった。

そして子どもたちの目は豊川の空襲だけでなく、他の地域の空襲の記事へも向かいはじめるところで、この授業は終わっている。以下にはその後の授業の進行

について一つの方向を予想してみたい。

3．一面見出し〔B29新型爆弾を使用〕

実は豊川空襲の記事は同じ一面トップの広島原爆投下に関する記事に続いているのである。それを見てみよう。

まず一面トップの見出しに〔B29新型爆弾を使用〕〔広島に少数機　相当の被害〕とあり、〔落下傘で中空爆発〕〔家屋倒潰と火災〕〔新型爆弾〕〔正義は挫けず　見よ敵の残虐〕等の見出しが続く。そして以下のように記述されている。

「【大本営発表】（昭和20年８月７日15時30分）

１，昨８月６日広島市は敵 B29少数機の攻撃により相当の被害を生じたり

２，敵は右攻撃に新型爆弾を使用せるものの如きも詳細目下調査中なり

◇…６日午前８時過ぎ B29少数機が広島市上空に侵入し少数の爆弾を投下したこのため相当数の家屋が倒潰すると共に市街地に火災が生じた。敵が使用したこの新しい爆弾は落下傘がついて居り落下の途中で破裂したもののやうである新型爆弾の威力について当局は早急に調査を進めてゐるから近く判明する筈である

◇…敵は新型爆弾の使用により無この（引用者注＝何の罪もない）国民を殺傷する人道無視の残虐性をいよいよ露骨に現はしたことは敵が対日戦の前途を焦慮してゐる証拠といふべく、敵米国は日頃キリスト教を信奉する人道主義を呼称しながらこの非人道的残虐を敢てせることにより未来永劫“人道の敵”の烙印を押されたもので彼の仮面は完全に剝げ落ち日本は正義において既に勝ったといふべきである、敵は引続きこの種の爆弾を使用することが予想されるがこれにより決して正義は挫かれない、一億国民はいよいよ戦意を昂めるであろう、これが対策を早急に促進することが絶対に必要である」

この記事から単元展開の方向について以下のようないくつかの示唆をうることができるように思う。

4．地域と世界をつなぐ人々のくらしとこころ

まず昭和20年７月初旬の時点で日本の多くの地域が米軍の空襲下にあったことは、すでに子どもの十分理解していることであるが、中学生ならその状況が新しい段階に入ったことがこの記事から理解できるであろう。すなわち豊川空襲の百機に対して広島の少数機による新型爆弾の投下が豊川の被害軽少に対して相当の被害を生じたと大本営が発表したということから、生徒は大本営すら認めざるをえない「相当の被害」の大きさを読みとることができるであろう。

つぎにこれと対応して、豊川空襲での祖父の妹の死→全体で2,544人の死→広島の新型爆弾による相当の被害→広島・長崎原爆投下での死者21万→太平洋戦争時の空襲による民間日本人の死者約30万→敗戦と新しい出発、という単元展開の大筋が立ち現れてくる。そのなかで第２次世界大戦の悲惨な状況とそこに占める原爆の大きさを、自分たちの身近な地点を出発して理解することができるのではなかろうか。

そして広島や沖縄への研修旅行で戦争の非惨さをつぶさに見聞することと上の理解が結びつくことが期待される。現地の見学が日常の学習と切り離されて行われるのではなく、身近な事例から出発し遠くのできごとを引き寄せながら、そこに貫徹する意味を求めていく学習過程にしっかりと位置づくことが望まれる。

さらに興味ある点は、大本営が「敵の残虐」を非難するのに「人道主義」をもちだしていることである。このような非人道的な戦争の末期においても、単に非難のために使われているとはいえ、人道主義の理念は生き続けているのである。

生徒たちがこの時点での人道主義を論じ、またそれを戦後日本の新しい方向と結びつけてとらえなおすことは、なかなか興味ある課題ではないであろうか。その課題はおそらく新城小の AS 児が発表して「おじいさんに豊川海軍工廠の空襲のことを聞くと、おじいさんがつらい顔をするので、聞きにくくなった」と言ったことにつながっていくであろう。

思想というもの、理念というものについて児童生徒の理解が表面的、孤立的に獲得されるのではなく、地域社会における人々の過去から現在そして未来へとつながっていくくらしとこころが日本および世界の国々の人々のくらしとこころとと結びつく過程のなかで形成されていくことは、国際理解と平和の教育にとってきわめて重要な課題であると考えるのである。